

第六章 大君の物語 大君の病気と薫の看護

[第一段 薫、大君の病気を知る]

待ちきこえたまふ所は、絶え間遠き心地して(そんな匂宮をお待ち申していらっしゃる宇治姫におかれては、途絶えが長く思えて)、「なほ、かくなめり(やはりこうなるのだ)」と、心細く眺めたまふに(と心細く沈んでいらっしゃる所に)、中納言おはしたり(中納言がお見えになりました)。

悩ましげにしたまふと聞きて(姉姫の御加減が悪いと聞いての)、御とぶらひなりけり(御見舞なのでした)。いと心地感ふばかりの御悩みにもあらねど(姉君は意識朦朧とするほどの大病に臥せていらっしゃったのではないが)、ことつけて、対面したまはず(大儀だからと言いついて対面なさいません)。

「おどろきながら、はるけきほどを参り来つるを(驚いて遠路を駆け付け申しましたのに)。なほ、かの悩みたまふらむ御あたり近く(ぜひ、姫様のお側近くに)」

と、切におぼつかながりきこえたまへば(と中納言が切に病状を知りたがり申しなさるので)、*うちとけて住まひたまへる方の御簾の前に入れたてまつる(姉君は休んでいらっしゃる母屋の前の南廂に中納言をお通し申しなさいます)。*「うちとけて住まひたまへる方」は母屋東側の姫の居室だろうか。場所のことなら「御方」でも良さそうなので、これは<「うちとけて」休んでいる>という状態を説明した言い方なのだろうか。それでも、「入れたてまつる」は御簾内に<お入れ申し上げる>のだから廂の間で、「御簾の前」は母屋の御簾の外側だろうから、それなりに補語して置く。

「いとかたはらいたきわざ(まことに見苦しい格好で)」と苦しがりたまへど(と姉君は臥して対面なさるのを気詰まりそうになさったが)、*けにくくはあらで(迷惑がらずに)、御頭もたげ、御いらへなど聞こえたまふ(頭を起こして応答などなさいます)。*「けにくし」は<憎らしげに、無愛想に、迷惑そうに>。

宮の、御心もゆかでおはし過ぎにしありさまなど、語りきこえたまひて(中納言は匂宮が先日は不本意ながら素通りなさったことなどを話し聞かせなされて)、

「のどかに思せ(三の宮のお心は変わりませんので、安心して下さい)。心焦られして、な恨みきこえたまひそ(不安に駆られて疑い申しなさいますな)」

など教へきこえたまへば(など諭し申しなさると)、

「ここには、ともかくも聞こえたまはざめり(妹の方は特に何も申していらっしゃらないようですが)、亡き人の御諫めはかかることにこそ(故宮の御懸念はこういうことだったのか)、と見はべるばかりなむ(と思われまふ事が)、いとほしかりける(不憫です)」

とて、泣きたまふけしきなり(とって姉君はお泣きになっている様子です)。いと心苦しく、我さへ恥づかしき心地して(中納言はとても心苦しく自分までが気が引けて)、

「世の中は、とてもかくても一つさまにて過ぐすこと難くなむはべるを(世の中はどんなことにしても一つの事で収まるのは難しいですから)。いかなることをも御覧じ知らぬ御心どもには(宮中の事情をご存じないお二人には)、ひとへに恨めしなど思すこともあらむを(三の宮の不参をただ薄情と辛くお思いになる事もあるでしょうが)、しひて思しのどめよ(今は耐えて長い目で見てください)。うしろめたくはよにあらじとなむ思ひはべる(ご懸念される縁では無いと存じます)」

など、人の御上をさへ扱ふも(などと、当の自分たちのことを余所に、他人の仲を世話焼くのも)、かつはあやしくおぼゆ(そういう話だから姉君と気詰まりなく話し合えるというのが、考えてみれば皮肉に思えます)。

夜々は、ましていと苦しげにしたまひければ(姉君は夜毎にいつそうとても気分が悪そうにしていらっしやったので)、疎き人の御けはひの近きも(他人の中納言が御側近くなのを)、中の宮の苦しげに思したれば(妹君が不都合にお思いだったので)、

「なほ、例の、あなたに(やはりいつもの客間でお寝み下さい)」

と人びと聞こゆれど(と女房たちが申し上げるが、中納言は)、

「まして(いつもと違って)、かくわづらひたまふほどのおぼつかなさを(このように患っていらっしやる御容態が心配で)、思ひのままに参り来て(そのことだけに参り来たものを)、出だし放ちたまへれば(遠ざけなさるのは)、いとわりなくなむ(全く心外です)。かかる折の御扱ひも、誰れかははかばかしく仕うまつる(また、こういう時の御世話も私以外の誰が手当てを施せましょうか)」

など、弁のおもとに語らひたまひて(などと言って、弁の御許に相談なさって)、御修法ども始むべきことのたまふ(山寺に平癒回復のご祈祷を始めるように指図なさいます)。

「いと見苦しく(ひどく無様で)、ことさらにも厭はしき身を(むしろ死んでしまいたいような私なのに)」と聞きたまへど(と姉君は中納言の計らいをお聞きになったが)、思ひ隈なくのたまはむもうたてあれば(その通りの気持ちをいうのも語弊があるので、大人しく従い)、*さすがに(それに、それでもやはり)、ながらへよと思ひたまへる心ばへも*あはれなり(ご心配くださる中納言の親切も有難かったのです)。*「さすがに」は注に<『集成』は「それでもやはり、長生きせよと願ってられる(薫の)気持もうれしく思われる。「さすがに」は、「ことさらにもいとほしき身を、と聞きたまへど」に応じる。『完訳』は「薫の言動に、大君は一面ではやはり、誠意を認めて感動する」と注す。>とある。*「あはれなり」は姉君の薫君に対する感謝だろうが、是を取って地文とすることで、そういう気持ちの姉君の「あはれ」さが示されている、のだろう。

[第二段 大君、匂宮と六の君の婚約を知る]

またの朝に(次の日の朝に)、「すこしもよろしく思さるや(少しはよろしくお成りでしょうか)。昨日ばかりにてだに聞こえさせむ(昨日と同じような形ででもお話し申したい)」とあれば(と中納言からの申し出があると)、

「日ごろ経ればにや(長引いております)、今日はいと苦しくなむ(今日は気分がとても悪いので、起き上がれません)。さらば、こなたに(ですので、こちらへどうぞ)」

と言ひ出だしたまへり(と姉君は御簾外の女房に声を掛けなさいました)。

いとあはれに(中納言はこの姉姫の応対がとても気懸かりで)、いかにもものしたまふべきにかあらむ(どういう病状でいらっしゃるのかと)、ありしよりはなつかしき御けしきなるも(以前よりは親しげに招き入れ下さる事が)、胸つぶれておぼゆれば(不安に思えて)、近く寄りて、よろづのことを聞こえたまひて(御簾に近付いて、いろいろなお話を聞かせ申しなさるが)、

「苦しくてえ聞こえず(苦しくてお返事できません)。すこしためらはむほどに(少し休みます)」

とて、いとかすかにあはれなるけはひを(と言う消え入りそうな姫のか弱い気配を)、限りなく心苦しくて嘆きみたまへり(限りなくいたわしく嘆いていらっしゃいました)。さすがに(そうは言っても)、つれづれとかくておはしがたければ(長々ともうしてもいらっしゃれないので)、いとうしろめたけれど、帰リたまふ(とても姫が案じられたが、中納言はお帰りになります)。

「かかる御住まひは、なほ苦しかりけり(このような山荘暮らしは、やはり気懸かりです)。所さりたまふにことよせて(転地療養なさる際に)、さるべき所に移ろはしたてまつらむ(都にお移り頂こう)」

など聞こえおきて(などと伝え置いて)、阿闍梨にも、御祈り心に入るべくのたまひ知らせて、出でたまひぬ(阿闍梨にも御祈祷を念入りに頼み伝えて山を出なさいます)。

この君の御供なる人の(ところで、中納言の供人で)、いつしかと、ここなる若き人を語らひ寄りたるなりけり(いつの間にかこの山荘の若女房と恋仲になっている者がいました)。おのがじしの物語に(その寝物語に)、

「かの宮の、御忍びありき制せられたまひて、内裏にのみ籠もりおはします(三の宮のお忍び通いは禁止されなさって御所に籠もってばかりいらっしゃいます)。左の大殿の君を、あはせたてまつりたまへるなる(中宮は左大臣の姫君を娶らせ申しなさるようです)。女方は(女の方の源氏殿は)、年ごろの御本意なれば(年来のご意向なので)、思しとどこほることなくて、年のうちにありぬべかなり(おためらいになる事は無くて、年内にも婚儀がありそうだ)。

宮はしぶしぶに思して(三の宮はこの結婚を窮屈にお思いで)、内裏わたりにも、ただ好きがましきことに御心を入れて(御所暮らしでも、当て付けがましく召人と遊び興じて)、帝後の御戒め

に静まりたまふべくもあらざめり(帝や後の結婚前に控えよというご注意に大人しくなさることもないようだ)。

わが殿こそ(わが中納言殿は)、なほあやしく人に似たまはず(やはり変わっていらっしやって)、あまりまめにおはしまして(あまりに真面目でいらっしやって)、*人にはもて悩まれたまへ(側仕えの若女房たちには張り合いが無いと持て余されていらっしやる)。ここにかく渡りたまふのみなむ(こちらへお通いなさるだけなのが)、目もあやに、おぼろけならぬこと(如何にも奇妙で、ただならぬこと)、と人申す(と皆言っている) *「ひと」とは誰か。敬語遣いがないので、同僚の従者たちあたりだろうか。「もて悩む」が<持て余す>なら、この「人」は召人たちかもしれない。若女房相手に話しているのだから、同じような人の事が話題になるのだろう。

など語りけるを(など語っていたのを)、「さこそ言ひつれ(そんな話だった)」など、人びとの中にて語るを聞きたまふに(など女房たちが話しているのをお聞きになって)、いとど胸ふたがりて(姉君はいつそう胸が塞がって)、

「今は限りにこそあなれ(いよいよこれまでだ)。やむごとなき方に定まりたまはぬ(高家の姫と結婚なさらない)、なほざりの御すさびに(その間だけの御慰めに)、かくまで思しけむを(どのようにお考えだったものを)、さすがに中納言などの思はむところを思して(それでも中納言の配慮をお聞きになって)、言の葉の限り深きなりけり(手紙だけは本気のようにしていたのだ)」

と思ひなしたまふに(とお考えになると)、ともかくも*人の御つらさは思ひ知らず(何も相手の三の宮の御苦心は考え付かず)、いとど身の置き所のなき心地して(ますます自分たちが惨めな立場にいる気分になって)、しをれ臥したまへり(力なく横になってしまいなさいました)。 *「人の御つらさ」も分かり難い。「御」の敬語があるので貴人とは分かるが、それが匂宮の<御苦心>だという文意は、私には簡単には読み下せない。私に当時の生活感が無い事は認めるが、「ひと」が此処では<相手>ないし<他人>みたいな語感だということに、直前の「ひと」の分かり難い語用とも相俟って、作者を責めたい気分が抜けない。

弱き御心地は(姉君は気弱になって)、いとど世に立ちとまるべくもおぼえず(ますます生き永らえる気力を失くしなさいます)。恥づかしげなる人びとにはあらねど(女房たちは気が引けるほどの良家の者は居ないが)、思ふらむところの苦しければ(それでも妹が慰み物にされたように思うだろう事が辛いので)、聞かぬやうにて寝たまへるを(聞かぬ振りをして寝ていらっしやったが)、中の君、*もの思ふ時のわざと聞きし、うたた寝の御さまのいとらうたげにて(妹君が狸寝入りしていらっしやるお姿がとても可愛らしく)、腕を枕にて寝たまへるに、御髪のみたまりたるほどなど(腕枕で寝ていらっしやると御髪が床に溜まっていて)、ありがたくうつくしげなるを見やりつつ(惜しく愛らしいのを見ながら)、親の諫めし言の葉も、かへすがへす思ひ出でられたまひて悲しければ(親が諫めた言葉も返す返す思い出されて悲しいので)、 *「もの思ふ時のわざと聞きしうたた寝」は注に<『源氏積』は「たらちねの親のいさめしうたた寝は物思ふときのわざとぞありける」(拾遺集恋四、八九七、読人しらず)を指摘する。>とある。思うところあってのお惚け、とはつまり、狸寝入り。

「*罪深かなる底には、よも*沈みたまはじ(父宮はあれほど修行生活をなさったのだから、まさか地獄には落ちていらっしやらないだろう)。いづこにもいづこにも(何処でも良いから)、お

はすらむ方に迎へたまひてよ(いらっしゃるところへ私を迎え入れてください)。かくいみじくもの思ふ身どもをうち捨てたまひて(このように非常に思い悩んでいる私たちを見捨てなさって)、夢にだに見えたまはぬよ(夢にさえ現れなさないんですね) *「罪深かなる底」は注に<罪深い人の行くところ、すなわち地獄をさす。>とある。 *「沈みたまはじ」は<主語は故父八宮。>と注にある。「よも」には<まさか、あれほど修行したのだから>が含意されていると読む。

と思ひ続けたまふ(と思ひ続けなさいます)。

[第三段 中の君、昼寝の夢から覚める]

夕暮の空のけしきいとすごくしぐれて(夕暮れの空模様が急に暗く時雨れて)、*木の下吹き払ふ風の音などに(木の下やさやかな山荘を吹き払うかの激しい風の音などに)、たとへむ方なく(例えようも無い心細さで)、来し方行く先思ひ続けられて(是までの暮らしや是からの暮らしが思い遣り続けられて)、添ひ臥したまへるさま(脇息にもたれて半身でいらっしゃる姉君は)、あてに限りなく見えたまふ(限りなく上品に見えます)。 *「木の下(このした)」は<頼れるものの庇護>であり<隠れ場所、逃げ場、休憩地>でもある。

*白き御衣に(病床ゆえに白い着物に)、髪は削ることもしたまはでほど経ぬれど(髪を梳く事もなさないで数日経ったが)、まよふ筋なくうちやられて(絡まりもせずにはらはらと流れて)、日ごろにすこし青みたまへるしも(このところ少し青白い顔色が)、なまめかしさまさりて(いっそう優美で)、眺め出だしたまへるまみ(庭を眺めていらっしゃる目元や)、額つきのほども(髪が生え際など)、見知らむ人に見せまほし(情緒の分かる人に見せたいほどです)。 *「しろきおんぞ」は注に<清浄なさま。病中の体。>とある。

昼寝の君(昼寝をしていた妹君は)、風のいと荒きに驚かされて起き上がりたまへり(風がとても荒いのに驚かされて起き上がりなさいました)。山吹(山吹色の鮮黄の内掛けに)、*薄色などはなやかなる色あひに(薄紫色の内着など華やかな色合いの衣服で)、御顔はことさらに染め匂はしたらむやうに(御顔はまるで染め付けて輝かせたように)、いとをかしくはなばなとして(とても美しく晴れ晴れとして)、いささかも思ふべきさまもしたまへらず(少しも憂う表情をしていらっしゃいません)。 *「うすいろ」は<薄紫色>らしい。

「故宮の夢に見えたまひつる(故宮が夢に出ていらっしゃって)、いとも思したるけしきにて(とても心配そうに)、このわたりにこそ、ほのめきたまひつれ(この辺に薄っすらと立っていらっしゃいましたが)」

と語りたまへば(とお話しなされると)、いとどしく悲しさ添ひて(姉君も非常に悲しくなると)、

「亡せたまひて後、いかで夢にも見たてまつらむと思ふを(亡くなってから、どうか夢にでもお会いしたいと思うのに)、さらにこそ、見たてまつらね(全く拝見申しません)」

とて、二所ながらいみじく泣きたまふ(とて御二人共に懐かしさに大泣きなさいます)。

「このころ明け暮れ思ひ出でたてまつれば(最近は毎日、思い出し申している)、ほのめきもやおはすらむ(少し出ていらっしやったのかしら)。いかで、おはすらむ所に尋ね参らむ(どうして、父宮のいらっしやる所に尋ね参じられましょう)、*罪深げなる身どもにて(罪深い女の身の私たちでは)」 *「罪深げなる身どもにて」は注に<女は罪障が深く極楽往生も難しいとする仏教思想。>とある。故宮は極楽往生しただろう、と姉妹は思っているらしい。

と、後の世をさへ思ひやりたまふ(と姉君は後世のことまで思い遣りなさいます)。*人の国にありけむ香の煙ぞ(唐国にあったような反魂香というものを)、いと得まほしく思さる(本当に欲しいとお思いになります)。 *「人の国にありけむ香の煙」は注に<『源氏積』は「白氏文集」李夫人の反魂香の故事を指摘する。>とある。「反魂香(はんごんかう)」は<それをたくと死者の魂を呼びもどして、その姿を煙の中に現すという想像上の香。中国の漢の武帝が、夫人の死後、恋しさのあまり香をたいてその面影を見たという故事による。>と大辞泉にある。

[第四段 十月の晦、匂宮から手紙が届く]

いと暗くなるほどに(だいぶ暗くなった頃に)、宮より御使あり(兵部卿宮から御手紙の使者がありました)。折は(惨めな境遇を悲嘆なさっていた時なので)、すこしもの思ひ慰みぬべし(少しは慰めになりそうだが)、*御方はとみにも見たまはず(御方様の妹君は直ぐには御手紙を御覧になりません)。 *「おおんかた」は注に<中君。匂宮の夫人という意味での呼称。>とある。

「なほ、心うつくしくおいらかなるさまに聞こえたまへ(やはり素直に穏やかな文言で御返事申しなさいませ)。かくてはかなくもなり*はべりなば(このまま私が死んだら)、これより名残なき方にもてなしきこゆる*人もや出で来む(今以上に残念な男を取り次ぎ申す女房も出てくるだろう)、とうしろめたきを(と心配ですが)、まれにも(時折にでも)、この人の思ひ出できこえたまはむに(兵部卿宮が思い出し申しなさろうというのに)、さやうなるあるまじき心つかふ人は(そのような見下げた判断をする女房は)、えあらじと思へば(居ないだろうと思いますので)、つらきながらなむ頼まれはべる(辛い立場ながら兵部卿宮が頼りなのです)」 *「はべり」は話中では自分のことを卑下して言う謙譲語で、「なりはべりなば」は<私がそうになりましたなら>という言い方らしい。で、「かくてはかなし」の「かくて」は、今の体調不良から推して<このまま>と言っているようだが、「はかなくなる」は<死ぬ>だから、「かくてはかなし」は<このまま自分が死ぬ>と言っているのであり、姉君は其処までの大病とは語られていないので、ちょっと意味が取り難い唐突感を覚えた。が、亡くなりたいと思っていたことは既に語られているので、その気持ちが出た言い方、ということだろうか。 *「ひと」は<女房>らしい。

と聞こえたまへば(と姉君が申しなさると)、

「後らさむと思しけるこそ、いみじくはべれ(先立とうとお思いなのが悲しい)」

と、いよいよ顔を引きたまふ(と妹君はいっそううなだれなさいます)。

「限りあれば(寿命は決まっているので)、片時もとまらじと思ひしかど(父宮亡き後は片時も死に遅れまいと思っていました)、ながらふるわざなりけり(今まで生き永らえてしまってきたものだ)、と思ひはべるぞや(と思っているのです)。*明日知らぬ世の、さすがに嘆かしきも(何

時が寿命なのか分からない私の人生が故宮の後を追えずに長々と嘆かわしいのも)、*誰がため惜しき命にかは(誰の為に惜しまれる命かと言えば、あなたの為なのです)」 *「あすしらぬよの」は注にく『源氏積』は「明日知らぬわが身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ」(古今集哀傷、八三八、紀貫之)を指摘。>とある。故宮への哀悼なのだろう。 *「たがためをしきいのちにか」は注にく『源氏積』は「岩くぐる山井の水を結びあげて誰がため惜しき命とかは知る」(伊勢集)を指摘。>とある。「水を結び上ぐ」は<水を掌ですくい上げる>ということらしい。「むすぶ」には<手の指をからませるなどして形をつくる。>という語用があり、「水を結ぶ」については<(ふつう「掬ぶ」と書く)手のひらを組み合わせ水ですくう。>と大辞泉にある。が、その掬った水はお供え水なのか、誰かに飲ませる為なのか、私には分からない。ただ、自分の命は他者の為にある、という意味ではありそうだ。

とて、大殿油参らせて*見たまふ(という姉君の言葉に諭されて、御方様は部屋明かりを持って来させて兵部卿宮の御手紙を御覧になります)。 *「見たまふ」は上文の「御方はとみにも見たまはず」に呼応した言い方と思われ、主語は<妹君>であり、「とて」は<と姉に諭されて>と読むべきに見える。

例の、こまやかに書きたまひて(御文面はいつものように細々と書いていらっしやって)、

「眺むるは同じ雲居をいかなれば、おぼつかなさを添ふる時雨ぞ」(和歌 47-22)

「同じ嘆きというものの、今日の時雨はいかばかり」(意識 47-22)

*「いかなれば」は何の掛詞なのか分からない。が、下文に「かく言ふは、神無月の晦日なりけり」というオチがある。十月初旬の紅葉見物では句宮は山荘を素通りしていたので、前回の訪問は九月十日に中納言と同道した時になる。四章六段に「九月十日のほどなれば、野山のけしきも思ひやらるるに、時雨めきてかきくらし、空のむら雲恐ろしげなる夕暮、宮いとど静心なく眺めたまひて、いかにせむと、御心一つを出で立ちかねたまふ折推し量りて、参りたまへり」と、薫中納言が句兵部卿を誘った記事がある。即ち、前回の訪問から今日で<五十日目なので=「いか(五十日)なれば」>という洒落になっている。いや、むしろ<相変わらず宮中に留め置かれて外を眺めて嘆いているが、もう五十日も会えないので今日の時雨は涙雨だ>という本筋に、「いかなれば(何故かしら)」を洒落て、恋文らしい楽しげな軽さを出している、と見るべきかも知れない。

「*かく袖ひつる(こんなに袖が濡れました)」などいふこともやありけむ(などという添え句もあったようで)、耳馴れにたるを(聞き慣れた有り触れた文面だったのを)、なほ*あらじことと見るにつけても(やはり噂どおりに兵部卿宮は戯れだったのだと考えるにつけても)、恨めしさまさりたまふ(御方様は無念さが募りなさいます)。 *「かく袖ひつる」は<『源氏積』は「いにしへも今も昔も行く末もか袖ひづるたぐひあらじな」(出典未詳)を指摘。『花鳥余情』は「神無月いつも時雨は降りしかどかく袖ひづる折はなかりき」(出典未詳)を指摘。『湖月抄』は「地」と草子地であることを指摘。語り手の推測を交えた表現。>と注にある。「耳馴れにたる」と常套句でありそうな語り口からも、この言い回しには当時の読者には常識だった下敷きの歌なり逸話なりがあったらしいが、指摘された引歌からだけでは、私には特別な情緒は分からない。ただ、「神無月」「時雨」は句宮の詠歌に掛かっているので、その辺のことを言っているのだろうか。なお、「ひつ」は<浸る、漬かる、濡れる>とのこと。 *「あらじこと」は<有り得ない事>よりは<有るまじき事=戯れ>と言っているのだろう。また、この文の主語は妹君だろうから、「なほ」は狸寝入りしていた妹君が<やはり女房たちが噂するように三の宮は遊びだったのか>と思った、という意味なのだろう。

「*さばかり世にありがたき御ありさま容貌を(あのよう世にも珍しい優れた御姿顔立ちを)、いとど、いかで人にめでられむと(いっそう何とか女の気を引こうと)、好ましく艶にもてなしたまへれば(見映え良く優美に飾りなされば)、若き人の心寄せたてまつりたまはむ(兵部卿宮に若女房たちが好意を持ち申し上げるのは)、ことわりなり(当然のことだ)」ほど経るにつけても恋しく(と、その男に抱かれた妹君は時が経つほど兵部卿宮が恋しく思われて)、*「さばかり~ことわりなり」は地文だろうか。私は妹君の内心文と読んで置く。

「さばかり所狭きまで契りおきたまひしを(あれほど重々しく結婚をお約束なされたものを)、さりとも、いとかくてはやまじ(そうは言っても、このままお見捨てなされるまい)」と思ひ直す心ぞ、常に添ひける(と思ひ直す気持ちがいつも付きまといます)。

御返り(御返事を)、「今宵参りなむ(今宵持参して帰参申したい)」と聞こゆれば(と使者が申すので)、これかれそそのかしきこゆれば(誰も彼も女房が姫に御返事を促し申せば)、ただ一言なむ(妹君は御返歌のただ一言を、こう詠みなさいませ)、

「霰降る深山の里は、朝夕に眺むる空もかきくらしつつ」(和歌 47-23)

「搔き曇る 深山の里は あられ空」(意識 47-23)

*注にく中君の返歌。「眺むる」の語句を用いて返す。『花鳥余情』は「霰降る深山の里の侘しきは来てたはやすく訪ふ人ぞなき」(後撰集冬、四六八、読人しらず)を指摘。『細流抄』は「深山にはあられ降るらし外山なるまさきの葛色づきにけり」(古今集、一〇七七、大歌所御歌)を指摘。>とある。「あられ」は厳しい寒さの表現か。「あられふるみやまのさとは」は、後撰集の引歌を踏んで「訪ふ人ぞなき」に句宮の不参を恨んで見せているらしい。歌筋は<同じ嘆きと言うけれど、深山の里はアラレ空で搔き暗んで、わたしもずっとあなたの不参に涙に暮れている>という、実に率直な恨み節だ。古今集の歌は、当歌で特に引いているようには思えない。「深山(みやま)」に対して「外山(とやま)」が<人里に近い山>のことで、「まさきのかづら」が<神事に使う常緑のツル性の木>だとは辞書で知れた。が、その常緑葉が「色付く(紅葉する)」のは変なので、この「色付く」は<実が熟す>ということらしいが、人里の豊かさは別世界で山里の冬は厳しい、くらの歌筋しか私には分からない。「色付く」を<女遊びに耽っている>と読めば、当歌とも意味は繋がるが、それでも詠む風情は違う印象だ。

*かく言ふは、神無月の晦日なりけり(この歌の贈答は、十月の末日のことなのでした)。*この一節は、先にも述べたが、上文のオチである。と同時に、下文へのフリとなっている、という洒落。

「月も隔たりぬるよ(丸一月以上も離れてしまった)」と、宮は静心なく思われて(と句宮は落ち着かなくお思いになって)、「今宵、今宵」と思しつつ(今夜こそはお思いになりながら)、障り多みなるほどに(お出掛けは支障が多い上に)、*五節などつく出で来たる年にて(五節祝儀が早く始まる年で)、内裏わたり今めかしく紛れがちにて(御所近辺がこの十月から準備で騒々しく)、わざともなけれど過ぐいたまふほどに(何となく出そびれて過ごしていらっしやる内に)、あさましく待ち遠なり(宇治では呆れるほど待ち遠しくなっていました)。*「五節などつく出で来たる年にて」は注にく『集成』は「十一月の中の丑、寅、卯、辰の日に行われる儀式。普通、月に三度ある丑の日が二丑の時は、上の丑の日から行われる。今年はそれに当るのであろう」と注す。>とある。

はかなく人を見たまふにつけても(匂宮は目移りした若女房と場当たりの情事なさっても)、さるは御心に離るる折なし(しかしながら御心には宇治姫を忘れる時はありません)。左の大殿のわたりのこと(源氏殿の六姫を正妻に娶ることについて)、大宮も(母中宮も)、

「なほ(とにかく)、さるのどやかなる御後見をまうけたまひて(そうした身元のしっかりした頼みとなる人を御貰いになって)、そのほかに尋ねまほしく思さるる人あらば(その他に側に置きたい人が居るなら)、*参らせて(此処に呼び付けて)、*重々しくもてなしたまへ(主として尊大に振舞いなさいませ)」 *「まゐらせて」は<此処に呼び寄せて>という、圧倒的に高位の身分意識を示す言い方、なのだろう。 *「重々しくもてなしたまへ」は、匂宮が女を<重く待遇する>のではなく、匂宮が女に対して<尊大に振舞う>ように、と中宮は王家としての自覚を匂宮に諭しているのだろう。

と聞こえたまへど(とお話しなさるが)、

「しばし(少し婚儀はお待ちください)。さ思うたまふるやうなむ(考えがございます)」

聞こえいなびたまひて(と匂宮はお応え申しなさって)、「まことにつらき目はいかでか見せむ(宇治姫を召人などと、そんな本当に惨めな目にどうして遭わす事が出来ようか)」など思す御心を知りたまはねば(とお思いの匂宮のお気持ちを御存じないので)、月日に添へてものをのみ思す(日を追う毎に宇治姫は物思いに暮れなさいませ)。

[第五段 薫、大君を見舞う]

中納言も(薫中納言も宇治に足が遠のいて召し人との情事に耽っていらっしゃる匂宮を)、「見しほどよりは軽びたる御心かな(思っていたよりは薄情なんだな)。さりともと思ひきこえける(そんなことはないだろうと思ひ申ししていた)」も(という自分の判断も)、いとほしく(嫌悪されて)、心からおぼえつつ(心から宇治姫に同情を覚えつつ)、をさをさ参りたまはず(気安く近付き申しなさいません)。

山里には(宇治山荘のほうには)、「いかに、いかに(お加減はどうですか)」と(と始終)、訪らひきこえたまふ(御見舞申し上げなさいませ)。「この月となりては、すこしよろしくおはす(十一月に入ってから少し持ち直していらっしゃいます)」と聞きたまひけるに(との報告を使者からお聞きになっていたが)、公私もの騒がしきころにて(五節間近で公私共に物入りの頃だったので)、五、六日、人もたてまつれたまはぬに(五、六日と見舞の使者を差し向け申しなさらなかったのを)、「いかならむ(変わりはないか)」と、うちおどろかれたまひて(と急に胸騒ぎなさって)、わりなきことのしげさをうち捨てて参でたまふ(大事な公務の忙しさを厭わずに御自身でお出向きなさいませ)。

「修法はおこたり果てたまふまで(祈祷は本復なさるまで)」とのたまひおきけるを(と中納言が言い置いていらっしゃったのを)、よろしくなりにけり(とて(小康を見たからと)、阿闍梨をも帰したまひければ(阿闍梨まで帰していらっしゃったので)、いと人ずくなにて(とても閑散として)、例の、老い人出で来て(例によって弁の御許が応対に出て来て)、御ありさま聞こゆ(姫のご病状を話し申します)。

「そこはかと痛きところもなく(何処と言って痛い所も無く)、おどろおどろしからぬ御悩みに(ひどくお苦しみでもないのに)、ものをなむさらに聞こしめさぬ(全く物を召し上がりません)。もとより、人に似たまはず、あえかにおはしますうちに(元々人一倍か細くいらっしゃる上に)、この宮の御こと出で来にし(今度の兵部卿宮と源氏姫の結婚話が出て来て以来)、いとどもの思したるさまにて(ますます悲観なさって)、はかなき御くだものをだに御覧じ入れざりし積りにや(ちょっとした御菓子でさえ見向きもされなかった所為か)、あさましく弱くなりたまひて(非常にお弱りで)、さらに頼むべくも見えたまはず(一向に良い兆しが見えません)。

よに心憂くはべりける身の命の長さにて(無駄に長生きしております)、かかることを見たてまつれば(こうしたお可哀相な姫のお姿を拝見申せば)、まづいかで先立ちきこえむと思ひたまへ入りはべり(先ずはとにかく私が先に旅立ちたいと念じております)」

と、言ひもやらず泣くさま、ことわりなり(と云い終える前に弁が泣くのも分かります)。

「心憂く(心痛で)、などか、かくとも告げたまはざりける(何故このような容態だとお知らせ下さらなかったのか)。院にも内裏にも、あさましく事しげきころにて、日ごろもえ聞こえざりつるおぼつかなさ(冷泉院でも御所でも非常に忙しい時で毎日は御見舞申せなかった不覚だ)」

とて、ありし方に入りたまふ(と言って中納言は前回同様の御簾前の廂にお入りになります)。御枕上近くても聞こえたまへど(姫の枕元近くまで御簾に寄って話し掛けなさるが)、御声もなきやうにて、えいらへたまはず(姫は声も出ないようでお返事なさいません)。

「かく重くなりたまふまで、誰も誰も告げたまはざりけるが(このように重くなりなさるまで誰もお知らせ下さらなかったのが)、つらくも(情けないが)、思ふにかひなきこと(それを言っても始まらない)」

と恨みて(と中納言は不平を言って)、例の阿闍梨、おほかた世に験ありと聞こゆる人の限り、あまた請じたまふ(例の阿闍梨を初め、およそ世に靈験あらたかと聞こえる修験者の限りを大勢請い招きなさいます)。御修法、読経、明くる日より始めさせたまはむとて(加持祈祷や読経を翌日から始めさせなさるという事で)、*殿人あまた参り集ひ(中納言家の奉公人が多数参集し)、上下の人立ち騒ぎたれば(上下の位の者が入り乱れて立ち働くので)、心細さの名残なく頼もしげなり(山荘は閑散とした心細さの名残りも無く頼もしげです)。 *「殿人(とのびと)」は注に<薫の家来、京の邸に仕えている者たち。>とある。「院にも内裏にもあさましく事しげきころにて」とあるので、六条院の家司たちだろうか。「京の邸に仕えている者たち」とあるが、近隣の荘園の下働きの方が役に立ちそうな気もする。

[第六段 薫、大君を看護する]

暮れぬれば(日が暮れたので)、「例の、あなたに(いつものあちらの御客間に)」と聞こえて(と申し上げて)、御湯漬けなど参らむとすれど(弁は中納言に夕餉の御湯漬けなど差し上げようとするが)、「近くてだに見たてまつらむ(姫の御側で看病申し上げたい)」とて(と云うことで)、南の廂は僧の座なれば(南の廂は僧の祈祷の座なので)、東面の今すこし気近き方に(御簾内の母屋

東側の姫の病床のすぐ近くに)、屏風など立てさせて入りみたまふ(衝立など立てさせて中納言は座していらっしやいます)。

中の宮、苦しと思したれど(妹君は中納言の御簾内での身内扱いを不都合にお思いだったが)、この御仲を(姉君と中納言の仲を)、「*なほ、もてはなれたまはぬなりけり(やはり親密でいらっしやるようだ)」と皆思ひて(と女房たちは皆思つて)、疎くもえもてなし隔てず(他人行儀に遠ざけ申しません)。*「なほ」は、女房たち自身がそれなりの手引きをした、という実感に基づいてもいるだろうし、何より実質で薫中納言は並の主人以上の手厚い援助を宇治山荘に施して来ている、という揺るぎない実績と、それを今後も変わらずに期待したいという気持ちがこもっているのだろう。

初夜よりはじめて、法華経を不断に読ませたまふ。声尊き限り十二人して、いと尊し。「初夜(そや)」は<六時の一。戌(いぬ)の刻。現在の午後8時ごろ。宵の口。また、その時刻に行う勤行(ごんぎょう)。そや。>と大辞泉にある。「六時(ろくじ)」は<仏教で、一昼夜を晨朝(じんじょう)・日中・日没(にちもつ)・初夜・中夜・後夜(ごや)の六つに分けたもの。この時刻ごとに念仏や読経などの勤行(ごんぎょう)をした。>とある。「中夜(ちゅうや)」は<六時の一。亥(い)の刻から丑(うし)の刻まで。現在の午後10時ごろから午前2時ごろ。半夜。>、「後夜」は<六時の一。寅(とら)の刻。夜半から夜明け前のころ。現在の午前4時ごろ。また、その時に行う勤行(ごんぎょう)。夜明け前の勤行。>、とのこと。

灯はこなたの南の間にもとして(灯火は此方の南廂の間に灯して)、内は暗きに(御簾内は暗いので)、几帳をひき上げて、すこしすべり入りて見たてまつりたまへば(中納言は几帳を引き上げて病床の間にそつと滑り込んで姫を押し申しなさると)、老人ども二、三人ぞさぶらふ(老女の二、三人が控えていて)、中の宮は、ふと隠れたまひぬれば(妹君はさつと隠れてしまわれたので)、いと人少なに(御側にはごく人少なで)、心細くて臥したまへるを(頼りないほど質素にして臥していらっしやる姫君に)、

「などか、御声をだに聞かせたまはぬ(どうして御声だけでもお聞かせ下さいませぬ)」

とて、御手を捉へておどろかしきこえたまへば(と言って薫君が姫の手を取ってお起こし申しなさると)、

「心地には思ひながら、もの言ふがいと苦しくてなむ(お答えしようにも声が出ませんので)。日ごろおとづれたまはざりつれば(このところお見えにならないので)、おぼつかなくて過ぎはべりぬべきにやと(会えないままで終わるのかと)、*口惜しくこそはべりつれ(残念に思っております)」*「口惜しくこそはべりつれ」は注に<『完訳』は「死を目前に、薫との不都合な関係も生じないと思うと、大君は胸奥に秘めた薫への好意をはじめ率直に告白。薫は感動のあまり嗚咽」と注す。>とある。特に「つれ」の持続感は印象的だ。この場面はあまりにも作られた、薫君も姉君もあまりに手が掛かりすぎる嫌いがあって、ずっと引いた気分で読んできたが、それでも此処まで付き合つて読み進んで来た読者としては、此処で感動しないと丸損なので、やはり「御手を捉へておどろかしきこえたまへば」には素直に驚かされて、この姫の告白には感じ入って置きたい。

と、息の下にのたまふ(と姉君は息の下に仰います)。

「かく待たれたてまつるほどまで参り来ざりけること(こうもお待ち頂くほど参らなかつたとは)」

とて、*さくりもよよと泣きたまふ(といって中納言は声をしゃくりあげて嗚咽なさいます)。*「さくり」はくしゃっくり。(感情の激しさに息を吐いて発声する制御が利かず呼吸の自律に伴って息を吸う時にも)声をしゃくり上げて泣く。すすり泣き。>とある。「よよ」は擬態音だろうか、よろよろと頼りないほど正体を無くしたさま、あたりだろうか。僧十二人の読経が無ければ、あたりに聞こえるほどの号泣だったので。良く出来た演出だ。が、それでも、此処までの素直な姿を薫中納言は今まで見せたことが無いので、その人となりの一端が偲ばれるそれなりの感慨はある。

御ぐしなど、すこし熱くぞおはしける(中納言が手を当てて御覧になると、姫は額に少し熱があたりでした)。「みぐし」は<頭髮の敬称>を言う他に<首や額の敬称>とも大辞泉にある。注には<薫は大君の額に手を当てる。熱がある様子。>とある。「手を当てる」という肉感はずいぶん補語したい。

「*何の罪なる御心地にか(「恋ひつつ逢はぬ」で何が悪いというお考えのようですが、では、何が悪くての御病状なのでしょう)。人に嘆き負ふこそ(逢わずに私を悲しませたから)、かくあむなれ(こうなったんですよ)」 *「何の罪なる(御心地にか)」は注に<薫の詞。『花鳥余情』は「水ごもりの神に問ひても聞きてしが恋ひつつ逢はぬ何の罪ぞと」(古今六帖四、片恋)を指摘。>とある。「水ごもり(みごもり)」は<水に隠れて見えない→秘めた恋心>ということらしい。「水ごもりの神」とは<みごもり一身籠り>で安産祈願の水天宮のことか。何かの洒落語用がありそうだが、私には分からない。片思いの歌ということなら粗筋は、子供を作るわけじゃないんだから恋しいのに逢わなくても別に罪は無い筈だ、くらいだろうか。ただ、姉君と薫君とは片思いというわけではないし、かと言って両思いというのとも微妙に違って、また情事が無いのだから姉君は身重でもないが、むしろ片思いでもないのに「恋ひつつ逢はぬ」は「何の罪ぞ」などと開き直れない<意固地さの罪>が明らかにある、と薫君は姉君に言っている、というくらいしか私には見当が付かない。また、「御心地(みここち)」という語にも<考え方>や<気分>の他に<病気、病状>という意味があって、「何の罪なる」の複意を別々の意味で受けるという仕掛けだ。文意をまともに受ければ、ずいぶん皮肉っぽい言い方のものであるものの、是は歌を引いた洒落語用だから、責めではなくて艶な親しみを示す言い回し、なのだろう。が、洒落語用は言い換えが利かないので、言い換え文は斯くもゴテゴテする。

と、御耳にさし当てて(と御耳に口先が当たるように)、ものを多く聞こえたまへば(中納言がいろいろなことを申しなさるので)、うるさうも恥づかしうもおぼえて(姉君はくすぐったくも恥づかしうも思って)、顔をふたぎたまへるを(顔を袖で被いなさるという可愛らしさを)、むなしく見なしていかなる心地せむ(死なせてしまったら何と張り合いの無い)、と胸も*ひしげておぼゆ(と薫君は胸が押し潰される気がします)。*「ひしぐ」は<押し潰す。勢いをくじく。>とある。圧力で変形する、みたいな語感。

「日ごろ見たてまつりたまひつらむ*御心地も(何日も看病なさって御疲れも)、やすからず思されつらむ(大変に思われます)。今宵だに、心やすくうち休ませたまへ(今夜だけは安心してお休み下さい)。宿直人さぶらふべし(私が殿居を勤めますので)」 *「みここち」の「御」は妹君への敬称らしい。唐突な視点転換で分かり難い。また、此処の「御心地」は<御疲れ>と訳があり、「御心地」を<御気分、御

体調>、「やすからず」を<御疲れ>とする言い換えもある気もしたが、現代語でも話し相手の事柄に「御」の敬称を付けて<あなたの>の意で語用するので、従う。

と聞こえたまへば(と中納言が妹君に申しなさると)、うしろめたけれど(妹君は看病を離れるのは気が引けたが)、「*さるやうこそは(お二人だけの話があるのだろう)」と思して、すこししぞきたまへり(とお思いになって少し退きなさいました)。*「さるやう」は「然る様」との表記で<しかるべき理由。相応の事情。>と古語辞典にある。下に「あらめ」などが省かれた言い方なのだろう。

直面にはあらねど(真正面にはではないが)、はひ寄りつつ見たてまつりたまへば(横になっていらっしゃる姫に這うように近付いてごく近くで中納言が見つめ申しなさるので)、いと苦しく恥づかしけれど(姫はとても気詰まりで恥づかしかったが)、「かかるべき契りこそはありけめ(このように近しく接する縁のある人なのだろう)」と思して(と中納言をお思いになって)、こよなうのどかにうしろやすき御心を(この上なく穏やかで頼りがいのあるその御好意を)、かの片つ方の人に見比べたてまつりたまへば(もう一人の兵部卿宮と見比べ申しなされば)、あはれとも思ひ知られにたり(有難いと思ひ知られるのでした)。「直面(ひたおもて)」は<顔を隠さない対面>のことでもあるらしいが、此处では既に物越しではないので、更に<真正面>の意かと思う。

「むなしくなりなむ後の思ひ出にも(死後の自分の印象が)、心ごはく、*思ひ隈なからじ(強情で偏屈な女になりたくない)」とつつみたまひて(と気が引けなさって)、はしたなくもえおし放ちたまはず(姫は中納言を邪険に押し返しなさりはしません)。*「おもひくまなし」は<考え過ぎる一勝手に決め付ける一偏屈だ>みたいな語用らしい。現代語には継がれていないので語感は分からない。「くまなし」は「隈無し」に「汲まぬ」が掛けてあるのかも知れない、みたいなノートを以前したような気がするが、それも良く覚えていない。

夜もすがら、人をそそのかして(中納言は一晩中、女房に指示して)、御湯など参らせたまへり(姫に御薬湯などを差し上げさせなさいましたが)、つゆばかり参るけしきもなし(姫は一口も口になさる気配がありません)。「いみじのわざや(悪い状態だ)。いかにしてかは、かけとどむべき(何とか持たせないと)」と、言はむかたなく思ひゐたまへり(と中納言は言葉も無く考え込んでいらっしゃいました)。

[第七段 阿闍梨、八の宮の夢を語る]

不断経の(日夜間断なく唱え続ける不断経の)、暁方のお替はりたる声のいと尊きに(明け方に読経僧が交代する時に重なる声の荘厳さに)、阿闍梨も夜居にさぶらひて眠りたる、うちおどろきて*陀羅尼読む(阿闍梨も徹夜の加持祈祷で印を結んでいて居眠りしていたが起こされて古代呪文を唱えます)。老いかれにたれど(老いてしわがれた声だが)、いと*功づきて頼もしく聞こゆ(それが功德のある洪みに思えて有難く聞こえます)。*「陀羅尼(だらに)」は<教えの精髓を凝縮させて含んでいるとされる言葉。教えの真理を記憶させる力、行者を守る力、神通力を与える力があるとされる呪文。訳経において意識せず、梵語音写のまま唱える。主として長文のものをいう。大咒(だいしゆ)。>と大辞林にある。不思議な呪文、あたりが無難な言い方だろうか。*「功づく(くどづく)」は<功德付く(功德を積んだように見える)>だろうか。手許の辞書には項目の無い語だ。

「いかが今宵はおはしましつらむ(今夜のお加減はいかがですか)」

など*聞こゆるついでに(など阿闍梨は御簾内にお尋ね申しては)、故宮の*御ことなど申し出でて(故宮の霊界での御現状など話し出して)、鼻しばしばうちかみて(鼻を何度もかんで)、*「聞こゆる」は誰が誰に話しているのか非常に分かり難い書き方だ。それでも、主語は阿闍梨らしいと見当も付きやすいが、であれば、相手は祈祷対象である姉君だろうと思われるが、その姉君の今の状態、さらには中納言がどうしているのか、妹君や女房たちの配置など、分からないことだらけで、具体像が描けない。ただ、其等はまとめて御簾内ではありそうなので、取り敢えず<御簾内>に向かって話し掛けたとして置く。*「おおんこと」は<生前の思い出>ではなく、死後の世界での現在の<八宮の様子>らしい。

「いかなる所におはしますらむ(宮様は何処にいらっしゃいますやら)。さりとも、*涼しき方にぞ、と思ひやりたてまつるを(そうは言っても悟り切って極楽浄土にいらっしゃるだろうと思ひ描き申し上げていましたが)、*先つころの夢になむ見えおはしましし(先だつて夢に現れなかつたのです)。*「涼しき方」は注に<極楽浄土をさす。>とある。*「さきつころ」は<先ごろ、先だつて>だから、何時なのかははっきりしないが、姫が病気になってからの事ではあるらしい。

俗の御かたちにて(世俗の人の御姿で)、『世の中を深う厭ひ離れしかば(世間を深く嫌って都から離れていた)、心とまることなかりしを(私自身は現世に未練はなかったが)、*いささかうち思ひしことに乱れてなむ(少し算段の狂いに迷いが生じて)、ただしばし願ひの所を隔たれるを思ふなむ(今しばらく念願の極楽へ達していないと思うと)、いと悔しき(実に残念だ)』*すすむるわざせよと(ということで、身共に追善供養をせよと)、いとさだかに仰せられしを(実にはっきりと仰せられたので)、たちまちに仕うまつるべきことのおぼえはべらねば(私自身は平癒の御祈祷中にて今直ちに供養奉る役を果たせませんので)、*堪へたるにしたがひて(差し当たつての手立てとして)、行ひしはべる法師ばら五、六人して、なにがしの念仏なむ仕うまつらせはべる(修行中の法師たち五、六人に、然るべき念仏を唱えさせ申し上げております)。*「いささかうち思ひしことに乱れてなむ」は、八宮が自分の死後の娘の行く末を案じて、姫との婚儀を薫君に打診したが、薫君が仏心の本懐として断つたので、姫たちの将来を悲観した、ということを行っているのだろう。「うち思ふ」は<内心で算段する>。*「すすむるわざせよ」は故宮自身の詞ではなく、上文の故宮の弁を聞いた阿闍梨が自身の立場として、故宮からそう命じられたもの、と受け取った、という言い方なのだろう。*「堪へたるにしたがひて」は<それに何とか堪える(適うべき)こととして→次善の策として>。

さては(その他には)、思ひたまへ得たることはべりて(思い当たる所がございまして)、*常不軽をなむつかせはべる(常不軽の行に弟子を就かせております)」*「常不軽(じやうふきやう)」は大辞泉に<「法華経」常不軽菩薩(ぼさつ)品に出てくる菩薩。人はみな成仏するとして、会う人ごとに軽んずることなく礼拝したという。常不軽菩薩。>とあり、また<「法華経」常不軽菩薩品の中で、常不軽菩薩が説いた24字の語を唱え、人々を礼拝して巡り歩く修行。また、その人。不軽。>ともあって、此処では一般的な追善読経の行に加えて、その「24字の語を唱え人々を礼拝して巡り歩く修行」を弟子に行なわせた、という文意らしい。ところで、「24字」と数字を挙げられると、特に内容に興味のない私でも、どういう文言なのかを確かめて置きたくなる。こういう浅はかな動機の者にとって都合の良いのは、手っ取り早く、取り敢えず目にした、という印象がもてる紹介ページだが、「知道寺ホームページ」というサイトの教学用語解説集の「常不軽菩薩」ページの「二十四字の法華経」という項目に<「我深敬汝等(がじんきょうによとう)、不敢輕慢(ふかんきょうまん)。所以者何(しよいしゃが)、汝等皆行

菩薩道(によとうかいぎょうぼさつどう)、当得作仏(とうとくさぶつ)。」(私は貴方たちを深く敬い、決して軽蔑しません。何故なら、貴方たちは皆が菩薩道を修行し、必ず仏になるからです。) [法華経 500 頁] >という記事があったので、取り敢えず目にした。で、是を阿闍梨に発言させた作者の意図するところだが、是は、故八宮の人となり(常不軽菩薩に準えられる、という阿闍梨の見方を示しているのだろうか。八宮の人柄については、断片的にはそれなりに語られていたと思うが、この辺の話は全く分からない。

など申すに、*君もいみじう泣きたまふ(など申すと、薫君も非常にお泣きになります)。 *「きみ」は注に<薫。>とある。「君」自体は分かり難いが、むしろ列挙の係助詞「も」の非主体表現が主対象の姉君ではないことを示しているのだろう。

かの世にさへ妨げきこゆらむ罪のほどを(父宮のあの世での極楽往生さえ妨害申そうという姉妹の独身を貫けなかった罪深さを)、苦しき御心地にも(姉君は苦しいご病状の中にも)、いとど消え入りぬばかりおぼえたまふ(いよいよ死んでしまいそうに思いなさいます)。

「いかで、かのまだ定まりたまはざらむさきに参でて、同じ所にも(どうか故宮のまだ行方定まりなさらぬ道先へ追いついて、同じ所に参りたい)」

と、聞き臥したまへり(と聞き臥していらっしやいました)。阿闍梨は*言少なにて立ちぬ(阿闍梨は言葉少なに中座いたしました)。 *「言少なにて立ちぬ」は、事情通の人の態度の場合は、樂觀出来ない状況を示す演出の事が多い。尤も、阿闍梨は八宮の修行生活や姫君たちへの未練について、冷徹で厳しい態度を見せていて、クセのある変人とも言えるほどの独特な価値観の持ち主のような印象もあるが、この阿闍梨という人物は冷泉院からの信頼も得ている高僧で、実は中央政界や王家筋の内情にも通じているとしたら、政争に敗れた没落王家の現実を直視していたのかも知れない。

この常不軽、そのわたりの里々、京までありきけるを(その常不軽の行脚僧は宇治近辺の村々から京まで歩き回りましたが)、暁の嵐にわびて(明け方の嵐に難儀しながら)、阿闍梨のさぶらふあたりを尋ねて(阿闍梨の許に報告に来て)、中門のもとにゐて(山荘の中門の端に座って)、*いと尊くつく(とても丁寧に平伏礼拝します)。 *「いと尊くつく」は注に<額づく、意。礼拝する。>とある。こういう「つく」は「突く」と表記するらしいが、「つく」は<何かに関連した事をする、事が起こる>という概念を基に非常に多様な意味を示す言葉、のような気がする。

*回向の末つ方の心ばへいとあはれなり(修行僧が最後に唱える回向呪文が実に感慨深い)。客人もこなたにすすみたる御心にて(客人の中納言も仏道に傾倒している御心なので)、あはれ忍ばれたまはず(有難味に堪えられず涙なさいます)。 *「回向(ゑかう)」は<回向文>のことらしく、「回向文(ゑかうもん)」は<日常の勤行(ごんぎょう)や法会(ほうえ)の終わりに、修めた功德を一切衆生(いっさいしゅじょう)に振り向けるために唱える願いの経文。ふつう偈頌(げじゅ)または陀羅尼(だらに)を唱える。回向偈(えこうげ)。えこうぶみ。>と大辞泉にある。今日一日行なった修行僧自身の善行を、その最後に故宮の功德に振り向ける為の経文、だろうか。何れ、私には何の実感も持てないが、「回向の末つ方」はゞの決まり文句の陀羅尼呪文みたいなもん、だったと思って置く。

中の宮、*切におぼつかなくて(妹君が姉君の容態が心配で)、奥の方なる几帳のうしろに寄りたまへるけはひを*聞きたまひて(北側の几帳の後ろに近付きなされた気配を衣擦れの音で気付

きなさって)、あぎやかにみなほりたまひて(中納言はきちんと居ずまいを直しなさって)、 *「切におぼつかなくて」は注に<大君の容体が気がかりで、の意。>とある。姉君の容態が気になるのは、この場の設定からして普通に有り得ることとは思いますが、今は門付け僧の話題だったのであり、別の対象を示すなら、その目的語を明示しなければ紛らわしい。こういう語り口はとても多いが、本当に気が知れない。 *「聞きたまひて」の主語は薫君らしい。文意文脈から其と知れるのだろうが、この時点では非常に分かり難い。此处で、どうして主語が省略出来るのかが分からない。

「不軽の声はいかが聞かせたまひつらむ(不軽の行者の声はいかがお聞きになりましたか)。*重々しき道には行はぬことなれど(格式張った法事では行なわない修行ですが)、尊くこそはべりけれ(尊く感じ入りました)」とて、 *「重々しき道には行はぬことなれど」は注に<常不軽の行は朝廷などでは行われないもの、とされている。>とある。匂宮の居る御所では行なわない、というフリなのだろうか。だとすると、匂宮には故宮の供養は勤まらない、みたいな意味になってくる。それでは泣きっ面にハチで、あまりに酷だ。是を、御所を離れた八宮が尊くて、御所に留まる匂宮は見掛け倒しだ、と取ってみても、既に匂宮の御方様である妹君には、決して<だから不参を気にするな>という励ましにはならず、何の慰めにもならないだろう。とすると是は、匂宮に代わって尊僧が来たと思っはどうか、みたいな言い方なのだろうか。分かり難い話が続くが、仏教がらみとなると余計に分からない。

「霜さゆる汀の千鳥うちわびて、鳴く音悲しき朝ぼらけかな」(和歌 47-24)

「宇治川に朝霜降りる冬千鳥」(意識 47-24)

*「さゆ」は「冴ゆ」で<冷える>で、匂宮の不参を言っているらしい。「汀の千鳥(みぎはのちどり)」は<水辺の多くの渡り鳥=宇治川の朝鳥たち>だろうが、是は<門前の名も無い僧=匂宮の代役=薫中納言自身>を被せているのだろうか。「うち侘ぶ」は<思わず難儀する>。妹君を慰める歌なんだろうとは思いますが、「冴ゆ」「侘ぶ」「悲し」からは救い様のない辛さばかりを感じる。「しも」「なくね」「あさぼらけ」や他の語用などに、何か気の利いた掛詞の洒落でもあるのだろうか、私には分からない。

*言葉のやうに聞こえたまふ(この歌を、普通に話すように妹君にお聞かせなさいます)。 *注には<話しかけるように。和歌は節をつけて詠じた。>とある。ということは、やはりこの贈歌は気の利いた言い回しなどない、宇治の寒い朝そのものに兵部卿宮の不参という憂いをしみじみと語って同情を示したもの、なのだろう。でも、それなら姉君の病床で歌詠みなどせずに、率直に匂宮の不参を薫君を不満に思っている、と妹君に話した方が誠実な印象なのではないか。どうも私には、此处の場面は良く分からない。

つれなき人の御けはひにも通ひて(中納言は恨めしい兵部卿宮の御印象にも似たところがあつて)、思ひよそへらるれど(つられて思い出されてしまうが)、いらへにくくて(とても親しくは応えられず)、弁してぞ聞こえたまふ(弁を介して返歌をお聞かせ申しなさいます)。

「暁の霜うち払ひ鳴く千鳥、もの思ふ人の心をや知る」(和歌 47-25)

「暁の霜うち払ひ、千鳥は鳴いて何思う」(意識 47-25)

*注にく中君の返歌。「霜」「千鳥」の言葉を用いて返す。>とある。「しも」や「ちどり」などの語に複意があるとしても、私には分からないので、歌筋で解釈する。と、「霜うち払ひ」が門前の修行僧の動作そのもので、それが宇治川の「鳴く千鳥」に似た印象で、その悲しげな鳴き声が自分の心情に重なる、と贈歌の思い遣りに対しては素直に込めている、と読める。とはいえ、冴えた空気に響く鳥の声は静まった周囲の寂寥感を際立たせる、という効果はあるが、それは鳥の声で人が周囲の状況を再確認した、ということであって、鳥の方に目を向ければ、そうした環境でも確かに息づく生命力を示しているのだから、この光景を悲しいと思うのは万人の共感とは言えないだろう。少なくとも、阿闍梨は山荘生活の寂しさを演出する為に常不軽の行者を差し向けたわけではないはずだ。難儀を打破するのは自分の心がけと行い次第という意味だろうから、御方は行者から自分の悲しみに同情されたと思って慰められるのではなく、自分に成り代わって修行した行者に感謝して、その有難味を噛み締めるべく、むしろ自分が行者の困難に同情すべきなのではないか。尤も、私は仏法も冬の宇治川の荒涼感も知らないが。

似つかはしからぬ御代りなれど(老女の弁では妹君には似合わない代役だが)、*ゆゑなからず聞こえなす(せいぜいしわがれぬように声作りして、情趣ありげにお聞かせ申します)。*「ゆゑなからず聞こえなす」はく弁が老女なりに声作りした>という事かと思うが、この場面は中納言が「言葉のやうに聞こえたまふ」に対応した形となっていて、一種の定型性が感じられるので、その様式自体が当時既に話題になっていた何かの事件や物語の場面に準えた写しになっていて、その模倣性で当時の読者は面白がったのかも知れない。と思うほど、此処の場面の話は私には面白さが分からない。

かやうのはかなしごと(こうしたちょっとした情緒ごと)、つつまじげなるものから(病床の姉君には気が引けるものながら)、なつかしうかひあるさまにとりなしたまふものを(今は親しげに應對してくださる姫を)、「今はとて別れなば、いかなる心地せむ(此処で死に別れては、何と無念な)」と惑ひたまふ(と中納言はうろたえなさいます)。

[第八段 豊明の夜、薫と大君、京を思う]

宮の夢に見えたまひけむさま*思しあはするに(この姫の御病状と故宮が阿闍梨の夢に現れなされた事を考え合わせてごらんになると)、「かう心苦しき御ありさまどもを(このように不幸な姫君たちの御現状を)、*天翔りてもいかに見たまふらむ(八宮霊は空を駆け下りてまでお見えになるほどに、どんなにご心配に御思いなことだろう)」と推し量られて(と薫中納言は思い遣られて)、おはしましし御寺にも(八宮がお籠もりになった山寺にも)、*御誦経せさせたまふ(追善供養の読経を上げさせなさいます)。*「思しあはするに」は注にく主語は薫。>とある。確かに、この文だけを見ると主語が分かり難いが、「思しあはす」のは上文の姫の病状と故宮の夢見とを思い合わせるのだから、当文を上文と分断する段立てに少し強引な嫌いがありそうだ。*「天翔る(あまかける)」はく大空を駆けめぐり。主として神や人の霊についていう。>と大辞林にある。注にはく『集成』は「死者の霊が成仏せぬ時、宙をさまようとされた」と注す。>とあるが、私には「ても」がく～してまでも>という係助詞語用に見えるので、この「天翔る」は故宮の霊が霊界からく空を駆け下りてきた>と読んで置く。*「御誦経(みずきやう)」は八宮の追善供養ということなのだろうが、八宮が極楽往生するには娘たちへの執着を捨てるしかないのではないか。であれば、この際は、薫君は自分の不手際を詫びるとか、何とか八宮を宥めるとかいうことではなしに、故宮には偏に姫君たちのことは早くお忘れ頂き、御自分の極楽往生に専心して頂き、以て姫君たちも父宮の執着から解き放たれんことを願う、みたいなことになって、椎本巻二章六段に阿闍梨が姫君たちの故宮の死に顔を見せなかった記事があつて、その事自体は死に顔を見ない事で却って未練が残るような気がして私は今でも疑問だが、むしろ八宮の極楽往生にとって娘へ

の執着が妨げだという阿闍梨の仏道心が、八宮の霊の存在を前提とした立場からの説明としては、死に顔にさえ会わない方が良くという一定の説得力を、今になって持って来たかの感はある。

*所々の*祈りの使出だしたてさせたまひ(また、別の所定の寺々には姫の平癒祈願の読経依頼をして差し上げなさり)、*公にも私にも、御暇のよし申したまひて(公私に欠勤願いを届け申しなさって)、*祭祓(陰陽師のお祓いなど)、よろづにいたらぬことなくしたまへど(万事抜かりなくなさったが)、ものの罪めきたる御病にもあらざりければ(物の怪に取り付かれた祟りでの御不調でもないの)、何の*験も見えず(何の効き目もありません)。 *「ところどころ」は薫君に所縁の所定の寺々ということなのだろう。薫君は当然に、公式には光源氏の末子だが、源氏家を継ぐ立場にあるのは長子の源氏殿であり、また家格としては六条院は明石中宮の実家として発展的に準王家となっているが、薫君自身としては母入道宮の縁故もあるだろうし、冷泉院に庇護されているので、また別筋の馴染みのある寺も有るのかも知れない。元々分からない話に、また分からない言い方をされると、どうせ分からないながらも、どの辺の事を言っているのか見当を付けなければ先へ進まないで非常に面倒だ。そして、それが見当違いの事も多々あるとあっては、稀に興に乗ることもあるものの、半ば苦行だ。 *「いのりのつかひ」は、故宮の追善供養ではなく、姫の平癒祈願の読経依頼だから、寺つながりで「所々の」というのは実に紛らわしい。もう少し別の言い方が出来ないものか。 *「おほやけにもわたくしにも」は注に<「公」は朝廷への欠勤届け。「私」は薫の私的な主人家筋への暇乞い。例えば、匂宮邸や夕霧邸へ。>とある。 *「祭り祓へ(まつりはらへ)」は<陰陽師(おんようじ)が、病氣平癒の祈願のために行うおはらい。>と大辞泉にある。吉を待ち望み、凶を追い払う、みたいな。 *「験」は「しるし」と読みがある。効験・効果のしるし・表れだから<効き目>。

みづからも(姫自身が)、平らかにあらむとも(治りたいと)、仏をも念じたまはばこそあらめ(仏にも願っていらっしやれば効き目もあろうが)、

「なほ、かかるついでにいかで亡せなむ(やはりもう死んでしまいたい)。この君のかく添ひて(この源氏の君がこのように付き添って)、残りなくなりぬるを(残らず全てを知られてしまったからは)、今はもて離れむかたなし(今後は遠ざけようもない)。さりとて(そうかと言って)、かうおろかならず見ゆめる心ばへの(このように熱心に見受けられる看病振りが)、見劣りして(治った後の普段の暮らしでは熱も冷めて、期待外れだったと)、我も人も見えむが(自分も相手も思うのが)、心やすからず憂かるべきこと(案じられて悲しい)。もし命しひてとまらば(もし命が強いて留まるなら)、病にことつけて(病氣回復の為を理由にして)、形をも変へてむ(剃髪出家してしまおう)。さてのみこそ(それが唯一)、長き心をもかたみに見果つべきわざなれ(長い愛情を互いに持ち続けられる方法だ)」

と思ひしみたまひて(と姉君は思い込みなさって)、

「とあるにても(死ぬにしても)、かかるにても(生きるにしても)、いかでこの思ふことしてむ(何とか出家は遂げたい)」と思すを(とお思いになるのを)、さまでさかしきことはえうち出でたまはで(其処までの考えであることは打ち明けなさらずに)、中の宮に(妹君に)、

「心地のいよいよ頼もしげなくおぼゆるを(体調がいよいよ思わしくなく感じられますが)、*忌むことなむ(仏道に入信すると)、いとるしありて命延ぶることと聞きしを(とてもご利益が

あつて命が延びると聞いたので、さやうに阿闍梨にのたまへ(そのように阿闍梨に話して下さい)」 *「忌むこと」はく仏の戒めを守ること。持戒。仏戒。いみごと。>と大辞泉にある。受戒すること=仏法の戒律に従うこと=入信すること、ということらしい。

と聞こえたまへば(と申しなさると)、皆泣き騒ぎて(女房たちは皆泣き騒いで)、

「いとあるまじき御ことなり(とんでもない御話しです)。かくばかり思し惑ふめる中納言殿も(これほど平癒を願つておいでの中納言殿も)、いかがあへなきやうに思ひきこえたまはむ(何と張り合いの無い事と思ひ申しなさいます)」

と、似げなきことに思ひて(と不都合なことと思つて)、頼もし人にも申しつがねば(実質の主人として看護管理している薫中納言に取り次がないので)、口惜しう思す(無念にお思ひです)。

かく籠もりゐたまひつれば(中納言殿がこのように宇治に引き籠もつていらっしゃるので)、聞きつぎつつ(次々と伝え聞いては)、御訪らひに*ふりはへものしたまふ人もあり(御見舞にわざわざ御自身でお見えになる高官もいらっしゃいます)。 *「ふりはへ」はくわざわざ、ことさらに>とある。困難をく振り切つて、敢えて挑む>ような語感らしい。

おろかに思されぬこと、と*見たまへば(中納言が宇治姫を大事に思つていらっしゃるとお見えになるので)、*殿人(中納言家の奉公人や)、*親しき家司などは(親しい家臣などは)、おのおのよろづの御祈りをせさせ(各自様々な平癒祈禱をさせて)、嘆ききこゆ(案じ申します)。 *「見たまへば」の主語は薫君で、是はく見えたまふ>の短縮なのだろう。 *「殿人(とのびと)」はく中納言家に仕える者>。 *「親しき家司(したしきけいし)」は個人的に親しく主従関係にあるが、立場としては独立した生計を立てている勢力下の者なのだろう。「家司(けいし)」はく親王家・内親王家・摂関家および三位以上の家に置かれ、家政をつかさどつた職。いえずかさ。>と大辞泉にあつて、役人または役職のように語用されることが多いようだが、であれば、此処で敢えて「殿人」と分けて語る意味が分からない。

*豊明は今日ぞかしと、京思ひやりたまふ(豊明の節会は今日だった、と中納言は都を思い遣りなさいます)。 *「豊明(とよのあかり)」は「豊明の節会(とよのあかりのせちゑ)」のことで、「豊明の節会」はく奈良時代以降、新嘗祭(にいなめさい)の翌日豊楽殿において天皇が新穀を食し、群臣に膳をもてなす宴会。五節の舞などが行われた。>と大辞林にある。注にはく豊明節会、十一月上の辰の日。>とある。

風いたう吹きて、雪の降るさまあわたたしう荒れまどふ(しかし此処宇治では、風が強く吹いて、雪降りが無い荒れます)。「都にはいとかうしもあらかし(都ではこんなに厳しくはないだろう)」と、人やりならず心細うて(と自分で此処に留まりながらも心細くて)、「疎くてやみぬべきにや(姫とは他人のままで終わってしまうのだろうか)」と思ふ*契りはつらけれど(と思うとその宿縁は辛い)、恨むべうもあらず(誰を恨むわけにもいきません)。 *「ちぎり」を此処で言うのは、二人の仲の<結論=姫の死>が予感できるほどに、既に衰弱した姫の病状であったことを示しているような不吉な語りだ。

なつかしうらうたげなる御もてなしを(親しみのある可愛らしい姫の応対を)、ただしばしにても*例になして(少しの間だけのことだとしても夫婦らしい暮らしと思つて)、「*思ひつることど

もも語らはばや(考えていた事々を語り合おう)」と思ひ続けて*眺めたまふ(と思ひ続けてずっと姫を見つめていらっしやいます)。光もなくて暮れ果てぬ(この日は日も差さぬまま暮れて、姫は目を開けないまま夜になってしまいました)。 *「例になして」は「れいになして」と読みがある。が、この「例」は意味としてはくためし。見本。型。>で、それも<夫婦らしい暮らしぶりの典型>のことなのだろう。 *「思ひつることども」は注に<『完訳』は「薫は結婚したかったことを。「つる」の完了形に注意。死が目前」と注す。>とある。 *「ながむ」は此処ではくずっと見つめ続ける>。

「かき曇り日かげも見えぬ奥山に、心をくらすころにもあるかな」(和歌 47-26)

「曇りの日 天気は悪い 気は暗い」(意識 47-26)

*「日かげ」は「日影(日の光、太陽)」と「ひかげのかづら(日陰の鬘)」の掛詞らしい。「日陰の鬘」はくヒカゲノカズラ科の常緑多年生の蔓性(つるせい)のシダ。山野に生え、茎は地をはい、針状の葉がうろこ状につく。>と大辞泉にある。で、元々はこの植物を髪飾りにし、後にその髪飾りを組紐で作ったらしく、その飾り紐も「ひかげのかづら」と言い、その髪飾りを五節の舞姫も付けたらしい。ということで、「日かげも見えぬ奥山に」はく豊明節会の五節舞も見物できない宇治の山里に>という洒落になっているらしい。こういう艶な情緒で沈む一方の気持に一息入れるのは、遣る瀬無さを乗り切る知恵だ。

[第九段 薫、大君に寄り添う]

ただ、かくておはするを頼みに、皆思ひきこえたり(今は中納言が看病していただくのを姫の回復の頼りに山荘の者たちは皆思い申ししていました)。例の(今日もいつものように)、近き方にあたまへるに(中納言が姫の御病床近くに座していらっしやるところに)、御几帳などを、風のあらはに吹きなせば(御几帳を中が露わに見えるほど風が吹き上げるので)、中の宮、奥に入りたまふ(妹君はきまり悪くなって奥に入りなさいます)。見苦しげなる人びとも(みすぼらしい老女たちも)、かかやき隠れぬるほどに(照れ臭く身を隠して、姫の側には中納言だけになると)、いと近う寄りて(ごく近付いて)、

「いかが思さるる(お加減はどうですか)。心地に思ひ残すことなく(考えられる限りの祈祷をして)、念じきこゆるかひなく(御回復を願い申し上げている甲斐もなく)、御声をだに聞かずなりにたれば(御声すら聞けないのでは)、いとこそわびしけれ(心細いです)。後らかしたまはば(先立ちなさったら)、いみじうつらからむ(本当に悲しいです)」

と、泣く泣く聞こえたまふ(と泣く泣く申しなさいます)。ものおぼえずなりにたるさまなれど(姫は意識もはっきりしていないほどのようだが)、顔はいとよく隠したまへり(顔は袖でしっかり隠していらっしやいました)。

「よろしき隙あらば(少しでも持ち直せば)、聞こえまほしきこともはべれど(申し上げたいこともあります)、ただ消え入るやうにのみなりゆくは(このまま弱る一方なのは)、口惜しきわざにこそ(残念です)」

と、いとあはれと思ひたまへるけしきなるに(と姉姫が中納言の看病を實に感じ入っていらっしやる様子なので)、いよいよせきとどめがたくて(中納言はますます涙を止められず)、ゆゆしう(不吉を感じて)、かく心細げに思ふとは見えじと(姫の病状を頼りなく思っているとは思わせないように)、つつみたまへど(感情を抑えなざるが)、声も惜しまれず(泣き声は洩れます)。

「いかなる契りにて(どういう前世の因縁で)、限りなく思ひきこえながら(この上なく姫を愛しながら)、つらきこと多くて別れたてまつるべきにか(辛い事が多くて、お別れ申さねばならぬのか)。少し憂きさまをだに見せたまはばなむ(少し厭な面でもお見せなされば)、思ひ冷ますふしにもせむ(恋の冷める切欠にもしようが)」

とまもれど(と中納言は姫を見守るが)、いよいよあはれげにあたらしく(いっそう愛しく惜しまれて)、をかしき御ありさまのみ見ゆ(可愛いとばかり思えます)。

*腕などもいと細うなりて、影のやうに弱げなるものから(顔を隠している袖の上から窺える腕などもとても細くなって、布のたわみの影のように弱弱しいものながら)、色あひも変らず、白ううつくしげになよなよとして(袖から出た手先の肌の色艶も変わらず白く清らかに優しく)、白き御衣どものなよびかなるに(白い着物を何枚か掛け布団にして柔らかそうに臥していらして)、*衾を押しやりて(錦の綿入れ布団を重そうに押し遣って)、中に身もなき雛を臥せたらむ心地して(胴体だけの雛人形のような形にしてあって)、御髪はいとこちたうもあらぬほどにうちやられたる(髪の毛はあまり多くなく手入れもしていないが)、枕より落ちたる際の(枕から落ち曲がる所が)、つやつやとめでたうをかしげなるも(つやつやと見事で美しいのも)、「いかになりたまひなむとするぞ(どうなってしまわれるのか)」と、あるべきものにもあらざめりと見るが(と生きて行かれそうにもなさそうに思えるのが)、惜しきことたぐひなし(例えようもなく惜しまれます)。*「腕(かひな)」はウデだが、それが直接見えているとは思えない。白い寝間着姿の姫が袖で顔を覆っている、その形態から窺える姫の印象を中納言の目線で語っている文だ。薄着だから服の上からも肢体の様子を感じられるのだろう。*「衾(ふすま)」はく布などで長方形に作り、寝るときにからだに掛ける夜具。綿を入れるのを普通とするが、袖や襟を加えたものもある。現在の掛け布団にあたる。>と大辞泉にある。つまり、綿入れ布団だが、下に「中に身もなき雛を臥せたらむ心地して」と、脇にぬいぐるみでも置いてあるような可愛らしさを演出しているので、人形衣装になるような錦柄の表地だったので。

ここら久しく悩みて(姉姫は長患いで)、ひきもつくろはぬけはひの(身繕いもしないものの)、心とけず恥づかしげに(気構えだけは崩さずに)、限りなうもてなし*さまよふ人にも多うまさりて(この上なく着飾って当ても無く薫君を待つ三条宮邸の女たちより数段勝って)、こまかに見るままに(見れば見るほど惜しまれて)、魂も静まらむ方なし(薫君の心底は全てを失いそうな焦燥感で一杯で、落ち着きようありません)。*「さまよふ」はく迷い歩く。思い迷う。>だろうか。「さまよふ」にはく悲しみ泣く>という言い方もあるようだが、いずれにしても此処で「さまよふ」を言う意味が私には分からない。で、逆に思う。逆に、というのは、「限りなうもてなしさまよふ人にも多うまさりて」は、渋谷訳文にはくこの上なく飾りたてる人よりも多くまさって>とあり、与謝野訳文にはく盛装して気どった美人というものよりはるかにすぐれていて>とあるようで、此処の「人」は女一般を意味する語用のように解釈されているが、むしろこの「人」は特定の女を意味しているのではないか、という視点に立つということだ。四章八段に「中納言は、三条の宮造り果てて、さるべきさまにて渡したてまつらむ、と思す。」という記事があって、それがどうも九月中のことだった

らしく、その思惑がらみで、匂宮に十月初めの紅葉見物を勧めたような経緯でもあり、それが山荘を素通りする結果となって、この姉君の気落ちと病状にも繋がっている、と見直してみれば、薫君は看病の直前まで姉君を三条宮邸に迎え入れる気満々だったと知れる。となると、この「さまよふ人」はく当てもなく薫君を待つ三条宮邸に囲った女たちを薫君が思い比べるというのは自然だろうし、むしろその他の女一般を思い比べる事に然程の意味は無いようにも思えてくる。で、私は左様に読んで置く。